

虹症候群

その存在が知られてきたとはいえ、実際に虹症候群の患者と会った人はやはり、一瞬驚きを感じてから、本当にいたのかと思うことが多いらしい、という調査結果が出た。現在虹症候群の患者は、日本におよそ十五万人、診断を受けに來ない例を含めるともう少しいるとされており、その多くが未成年であるとする統計もある。もっとも、症状を発しても比較的すぐに症状が消える例も多く報告されており、一度でも虹症候群にかかった人はもう少し多くなると見積もられている。

虹症候群が最初に確認されたのは、今から二十二年前だった。千葉県の十歳の少女に、瞳が虹色に変色するという典型的な症状が現れ、その後各地で同じような症例が報告されるようになると、誰が命名したかは定かではないが、その症状は虹症候群という名称で呼ばれるようになった。瞳が虹色に変色するとはいつても、視力や視野に異常が生じるわけではない。なぜなのかは諸説あり、角膜表面に微細な凹凸が生じるためなどと言われているが、原因は特定されていない。ともかくその症状が日常生活に支障をきたすというとは特にないため、ほとんどの患者は外科的な治療を受けることはない。

専門家や医者は、その突然現れた奇妙な症状の原因も治療法も、それどころか発症した患者の共通点すらほとんど何も明らかにできていない。患者には子供が多いが、大人に発症することもあり、発症して一ヶ月で症状が消えることもあれば、成人してもずっと虹色の瞳が残るといった例もある。つまり発症時期も症状の継続期間もバラバラであり、専門家が多くの知見を集めたにもかかわらず、肉体的、精神的な問題との因果関係も発見できてお

らず、現代の医学では原因を特定することは不可能だとサジを投げた人もいる。中には、治療する必要がない病気であり、治療法を研究する必要がないという学者もいる。虹症候群の症状は瞳が虹色になること以外には何もなく、それが直接日常生活に支障を来すことはないため、わざわざ研究費をつぎ込んで治療法を確立させる必要もないというのだ。

しかし、虹症候群の症状は「基本的には」日常生活に支障はないが、社会的には虹症候群の患者が暮らしていく状況におかれることが多いということも、多くの識者から指摘されている。単純に目の色が違うということだけでいじめを受けるといった例もあるが、それ以上に問題視されている事態も起こっている。というのも、虹症候群を発症する患者にある共通の傾向があるのではないかという科学的な根拠のない俗説が、マスコミに取り上げられるなどして世間に広まったからである。その共通の傾向というのが、「虹症候群の患者は総じて何かしらの才能がある選ばれた人であり、天才か天才予備軍である」といった類のもので、その先入観によって虹目（虹症候群に出る症状）の患者を見る風潮が強まっている。いわゆる血液型性格診断のようなものだ。

その俗説はただの憶測によって生じたというわけではなく、様々な要因が複合的に絡んで発生したものであるらしい。まず、虹症候群が知られるようになった数年後に、虹色の目を売りにしたモデルや俳優、芸能人が現れるようになった。最初のころは漫画を実写化した作品に起用されることが多かった。瞳にうつすらと七色がかった神秘的ともいわれるその外見によって、彼らは人気を得た。しかもそれだけではなく、その瞳の色がずっと七色のままだった人は実力派として強い支持を長く受

ける一方で、瞳の色が活動途中で元に戻った人たちは、人気落ちることが多いように見受けられる、という意見がネットなどで見られるようになった。もちろん瞳の色が元に戻ったから人気落ちたに過ぎないとする冷静な意見も多くあるが、インタビュの受け答えなどで独特な感性を発揮する人も、ずっと虹目が残っている俳優などが多いという意見も根強く言われ続けている。

これだけなら単なる偶然だとする人が多い中、別の報告例（というにはあまりに科学的ではないが）も様々なところから聞かれるようになった。例えば芸術系の大学で、虹色の瞳をした学生はおしなべて独創的な作品を創り、高評価を受けているといった話や、文学賞で最終選考に残った作者が、選考過程では一切顔を知られないはずなのに、凶ったように虹症候群の患者ばかりだったという事例も起きた。後者については、カラー写真つきで特集を組まれたこともあり、驚きをもって世間一般に受け入れられた。それと前後して漫画やドラマでも虹症候群の患者を取り上げたものが始まったが、虹症候群の登場人物は天才として描かれることが多かった。

このように、いつの間にか「虹症候群」才能のある人がなる病氣」という図式が浸透していった。そんな中で、これと違って特徴のないと思われていた子供に虹症候群が発症すると喜ぶ親が現れ始め、何に才能があるかを確かめようといういろいろなことをやらせてみる、という育て方をする親が出るようになったという報告が上がり始めた。そうして不思議なことに、才能を伸ばそうとした例の多くが奏功して、虹症候群の子供が何らかの分野に対して天才的な能力を開花させることが多いという調査結果まで発表された。

この結果には異論も多くあったが、この結果がまたマ

スコミで大きく取り上げられると、世の親たちの虹症候群に対する科学的でない認識はさらに強固になった。医者に対する聞き取り調査では、これまで少数ながらあった「どうやったら虹症候群は治るのか」という相談が減り、かわって「どうやったらうちの子に虹症候群を発症させることができるのか」という問い合わせが激増したという。また親のみならず、社会的にも虹症候群発症者に対する関心が高くなり、虹症候群にかかる方法がまことしやかに語られるようになり、虹症候群は潜在的な才能の表れだと解説して、その才能の活かし方を指南する本なども店頭に並ぶようになった。

この社会現象ともいえる状況で、様々な問題や弊害も表出することが多くなってきた。学校などでのいじめや差別は、まだ虹目と才能が結び付けられていなかった頃からあったが、それが才能の象徴と見なされるようになると、人とは違うということだけでなく、才能があるということに対する妬みや僻みも加わって、さらにエスカレートするようになったりもした。特に、虹症候群のくせに運動も勉強もできない、本当に才能があるのかと貶められるという事態も深刻な問題として取り上げられるようになった。虹目と才能の因果関係は解明されていないが、子供同士でのいじめの材料としては十分だったということだ。

また、虹目に対する親や周囲の認識が変わってきたことによって、子供に精神的な負担をかけていると思われる事例が発生していることも、多くの識者が指摘している。その主なものは、虹症候群を発症した子供には才能があるという考えの下、様々な習い事をさせたり塾に通わせたりして、何らかの才能を開花させることを過剰に期待される、という例である。子供がその大きすぎる期

待を受けることで、期待に応えようと自分の希望を抑えてしまったり、反発して親子の関係が壊れてしまったり、あるいは期待に応えないといけないという強迫観念が生じて、ノイローゼ気味になったりするという問題が実際に児童相談所にも寄せられているという。このような親の過剰な期待は、虹目の子供に限らず多くの家庭で見られることではあるが、虹症候群の場合は親だけでなく周囲の人々（場合によっては教師が虹症候群の子供に期待をかけたたりもするそう）からの期待も非常に強くなる傾向にあり、それに耐えられず苦しむことがままあると言われている。

ちなみに、これまた奇妙なことに、そのように虹症候群ゆえに期待されて躓いた子供の多くは、その虹目の症状が亡くなってしまふことが多いそうである。その場合親の側としては複雑だというのが、子供の側としては、目が普通に戻ってほつとしたということが多いようだ。

そしてもう一つ、自分の子供が虹症候群にかからないことを嘆く親の増加ということが指摘されている。

つまり自分の子供に虹症候群が発症しないのは、この子に才能がないからだと言われ、勝手に落胆し、なぜ虹症候群にならないのかと子供に当たる親まで現れているという。このように言われた子供の反応は様々だが、期待されすぎる場合と同様の反応も多くみられるほか、虹症候群でないと愛してもらえないと感じる子供も多くいると考えられている。

このような、虹症候群の子供を取り巻く状況は、ニュースで特集が組まれることがあるほど社会問題化しており、人権団体や研究者団体などが、科学的根拠のない虹症候群に対する偏見を正そうと呼び掛けている。しかし中には、虹目だからという理由で入学試験や就職に有利

になったり、逆に不利になったりという事例も数少ないながら報告されており、依然として根強い誤解が蔓延している。ちなみに就職などで不利になったという実例が、とある商社の採用試験で発覚したが、その際に虹目の人物を不採用にした理由は「虹目という特殊な見た目は取引先との円滑な商談の妨げになりかねない。また、飛び抜けた才能があるために、協調性の欠如を疑われかねない」といったもので、特に後者の理由には「天才は協調性がない」といった誤解もあり、実に二重の偏見に基づいて採用の是非を判断したということで、この不公平な採用を行っていた会社は社会的に批判を受けることになった。

さらには、一部の国会議員から「才能があると考えられる虹症候群患者を支援して才能を開花させ、社会に貢献してもらおう」といった趣旨の法案が提出されそうになったこともあったが、科学的にも人権的にも問題があると非難され、それを主張した議員らのうち二人が職を失った。このような事態も、虹症候群に対する偏見が非常に深刻であることを物語っている。

これまでに述べた社会的な混乱や問題は、前例のない奇異な症状に対して、どのように認識して対処すべきかをつかみかねているということを示している。では実際には、虹症候群についてどの程度のことがかかっているのだろうか。その疑問に答えるため、民間の研究所が、信頼できるデータのみをもとにまとめられた報告を公表している。

その報告によると、各病院から報告された患者総数は、過去二十三年で約十万人に上る（延べ人数）。年ごとの発症患者数に大きな変動は見られず、毎年約五千人弱の新規患者が報告されている。しかしそのうちの約九十五

パーセントの患者は、一年以内に虹目症状が消えてしまふという。一年以上たっても虹目が消えない患者の症状は長期化する傾向にあり、二十年以上症状が消えない患者も百人ほどいるとされている。そのうち二十六人については追跡記録が行われているが、いずれも若くして各方面で特異な才能を発揮して活躍しているという。その中には実力俳優と呼ばれる坂原直哉や、大リーグへ移籍した野垣翔などが含まれており、「虹症候群Ⅱ天才」の図式を支持するデータとしてたびたび取り上げられる。しかし一方で、単なる偶然であるとか、十万人もいればそのうちの何人かは才能がある人がいて当然だという声も多い。もちろん「天才」や「才能がある」という定義も曖昧であり、追跡記録自体に科学的であるとはいいたい点もあるが、虹症候群が一年以内に消失した患者についての同様の追跡記録では、高い才能を認められているという例があまり報告されておらず（五百十二人のうち三十七人とどまる）、この結果だけでみると、虹症候群の継続年数が長いほど才能が顕在化するという傾向は非常に強いといえる。

ではその「才能」についてであるが、虹症候群の長期患者で多く見られるのは、まず作家や画家、音楽家といった芸術分野で「才能」を発揮している人である。しかしそれ以外にも、科学研究やスポーツで顕著な活躍を示している人や、起業して急成長している企業の社長、俳優やお笑い芸人など、あらゆる分野で「才能」を開花させている例が報告されている。また、その調査では患者の性格などを聞き取り調査しているが、そこで特に長期患者の特徴として多く聞かれたのが、「好きなことへの集中力が高く、他のことを顧みないこともある」というものであった。この聞き取り調査は、主に虹症候群の子供

を持つ親に対して実施されたものであるが、虹症候群の患者の中でも「何に対しても飽きっぽい、集中力がない」といった回答が見られた子供については、その後数ヶ月で症状が見られなくなることがほとんどであった。

さらに興味深いのは、その調査と並行して行われた、発症前と発症後の子供の育て方についての聞き取り調査である。その調査によると、発症前の子供の育て方については特に目立った傾向はみられず、「虹症候群になるためのハウツー本」にそって育てたという家庭もあれば、かなり自由に育てたという家庭もあり、逆に厳しくつけてみっちり勉強させていたという家庭もあった。つまり家庭の教育方針と虹症候群の発症は関係がないということになる。しかし虹症候群が発症した後の育て方を聞くと、長期患者となった子供の親は「発症したからといって接し方を変えることはなかった」「周囲の人は静かに見守ってくれた」という回答が目立ち、虹目の症状が消えた子供の親は「発症後に接し方を変えた、才能を伸ばせるように協力した（しようとした）」「周囲の期待が高まった」といった回答が比較的高い割合を占めた。つまり発症後の外部環境などが、虹症候群の継続期間に影響している可能性が高いということである。

これらの結果が公表されたことで、ますます虹症候群の原因や特徴が不明瞭になり、識者たちの頭を悩ませ続けている。しかも、予算を取り付けての調査で虹症候群の原因や特徴を何も明らかにできなかったということ、高額な調査費が無駄になっているのではないかと、このため現在では、より踏み込んだ調査はほとんど行われていないのが実情である。特に生活に深刻な支障が出るわけでもないのに、難病指定が受けられるわけでもなく、

調査を行う研究者も減少の一途をたどっている。

結局、科学的裏付けのない憶測じみた主張がまことしやかに語られている現在でも、この虹症候群をめぐる混乱が沈静化したとは言えない。今日でも数万人の患者が肩身の狭い思いをしながら暮らしていることが想像に難くないが、目の色をごまかすためのカラーコンタクトが患者に普及してきたこともあって、虹目の患者を見かける機会も少なくなり、徐々に都市伝説のような扱いにもなってきている。しかしかれらへの誤解や偏見は依然として根深く、患者らは今でもそれに振り回されている。僕も個人的に虹症候群の患者を数人知っているが、彼らがこれからのように成長していくのか、周りの環境がどう変わっていくのか、注意深く見ていきたい。